「生きづらい」と感じることはなんですか？

台東区在住の３名の方にフォーラム講演会と同じテーマで、編集委員がお話を聞いてきました。

転

勤で中国の上海から台東区に暮らし始めて４年になるコウさん（34歳）は二人の子供の育児で、日々さまざまな壁に直面しています。

「最初の頃は、学校で使うノートや鉛筆など、どこで買えるのか、どんなものが必要なのか、まったくわかりませんでした。体育着や水着なども、手紙でお知らせがくるけれど、何をどうしたらいいのかわからなかったです」

学校の先生がフォローはしてくれるそうですが、コウさんは日中は仕事をしているため、先生に相談することはなかなか難しいと言います。

「日本人のお母さんたちと仲良くなれるのかというのもすごく不安でした。なるべく仕事を休んで、保護者会やＰＴＡの会にも出るようにしましたが、輪に入ることができませんでした」

１年ほどそのような状態が続き、慣れない地での生活に、仕事と育児も重なり、コウさんは体調を崩してしまいました。そんなある日、学校の保護者会後に一人のお母さんが話しかけてくれたのだそう。

「中国のどこ出身なんですか？わからないことがあったらいつでも連絡ちょうだいと連絡先を交換してくれました」

その方は、台東区で生まれ育ち、結婚してからも同じ町に住んでいることもあり、近所のことにも詳しく、学校のことや生活にまつわることなども教えてくれます。

「運動会での場所取りのコツとか、制服が安いお店、習い事のことなどいろいろ教えてくれます。一時は、話せる人もいなくて、中国に帰りたいとずっと思っていました。でも、その人が『困ったときはお互い様って言葉が日本にはあるんだよ』と言ってくれ、私のことを助けてくれます。毎日、いろいろ大変ですが、この町での生活を楽しんでいきたいと思っています」

わからないことだらけで
話せる人もいなくて
帰りたいと思っていました。

下

町の雰囲気が好きで、この町に引越してきたと話すカナさん（27歳）とサチエさん（31歳）。二人はレズビアン＝女性同性愛者で、互いの人生を共に歩むパートナーとして一緒に暮らしています。

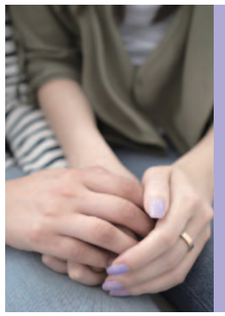
「私は友達にも親にも、自分が同性愛者だということは話していません。親には『早くいい人を見つけて結婚しなさい』と言われます。親に彼女のことを話して『私は大丈夫だよ、幸せだよ』って伝えて安心させてあげられたらいいなあと思うけれど、親は〝同性愛〟なんて受け止められませんから」とサチエさん。

一方、カナさんは友達や家族、同僚や上司にもサチエさんの存在を話していて、週末にはサチエさんと両親と食事をすることもあるのだそう。

「これからも二人で支え合って暮らしていきたい」と話すカナさんとサチエさん。二人が生きづらいと感じるのはどのようなことでしょう。

「同性カップルだと、賃貸住宅が借りにくいです。ゆくゆくは二人で家を買いたいと思っても、婚姻関係にないので当然、二人でローンは組めません」とカナさん。

そしてサチエさんも続けて「病院の問題もあります。もし彼女が急病で入院するようなことがあっても、家族でないと面会謝絶ということも起こりえます。最近では生命保険の受取人を同性パートナーにすることもできるようになってきましたが、男女であれば結婚によって受けられるサポートが、同性カップルには何もないというのが現状です。私たちは生計を一にして生活を共にしているけれど、法律の下では赤の他人です。生きづらさがなくなるように公的な制度が整っていくことを願っています」



同性パートナーは
法のもとでは
赤の他人です。

谷

中に住む乳幼児をもつ家庭に向けて地域の情報を発信する「谷中ベビマム安心ネット」（以下略・ベビマム）。主宰の石田桃子さんがベビマムを立ち上げたのは２０１１年４月のこと。きっかけは３月に起きた東日本大震災でした。

「乳幼児をもつ家庭って、保育園でもなく、幼稚園でもなく、どこにも所属していない感じがあるんですよね。そんな〝どこにも所属していない感〟の中で、お母さんたちは初めての育児でヘトヘトになっていて。そこに大地震が起きて、周りのお母さんたちを見ていても、とても強いストレスがかかっているなと感じていました」

被災地へ思いを馳せながら、東京では、余震への恐怖や原発問題、計画停電、紙おむつやミルクの買い占め騒動が起きていました。そんな不安定な状況の中で、お母さんはいざとなったら赤ちゃんを抱えて避難しないといけないという緊張の日々が続きました。

「これは横のつながりをつくったほうがいいなと思いました。正しい情報を共有して、困っている人には近くの誰かが手を差し伸べる。せっかく同じ町に住んでいるのだから、困った時はお互い助け合えばいいんじゃないかなと。そんなつながりをつくっていけたらと思いベビマムをつくりました」

こうして始まった谷中ベビマム安心ネット。谷中エリアの保健、防災、医療、育児、お祭りなどの生活情報を発信するほか、生活必需品や育児用品などを譲り合う輪を広げたり、皆で顔をあわせて集まれるようなイベントを開催しています。

ベビマムの活動を続けて７年目。石田さんのもとにはいろいろな人が集まってくるようになりました。

「町のことや家族のこと、心配な子のことやパートナーのことなど、個人的に相談を受けることがあります。地域の方から『あの人のところに行けば何か知っているかもしれない』と、生活の中での困りごとや課題を抱えている人を紹介されることもあります。シングルマザーや発達障害の子をもつ方、精神疾患のある方や思春期の子などさまざまです」

石田さんは、そのような方の話を聞き、時に公的機関へつないだり、石田さんの知り合いの専門家に相談するなど、問題解決への〝入口〟のような存在になっています。

「いろいろな方とお話をする中で、自分のつらさを素直に言える場がないと、今の世の中、生きていくのは難しいんだな、生きづらいんだなあと感じています。つらい人は、つらいって、素直に口にだして言ってもいいと思うんです。ただ、それを言える人だったり、言える場が必要なんですよね」

その〝言える場〟になれたらと、石田さんは自宅を開放しています。近所の人が「家にいるのがしんどい」と石田さんの家に来て、気持ちが落ち着くまでリビングで時間を過ごしたり、近所の子供たちが遊びに来て、子供を迎えに来たお母さんも一緒に晩ごはんを食べて帰るなんてことが日常的にあるのだそうです。

昨年の９月からは、月に一度、石田さんの家で「みんなでごはんを食べる会」を始めました。

「自分の居場所や、自分を受け入れてくれる場所って、あちこちにあっていいと思うんです。『ここなら自分は大丈夫』という場所が選べたらいいなと。ちょっとした悩みだったり、ちょっとした相談事を話せる場がなかったために、大事になってしまうことってあるんですよね。それ、誰かに話せていたらよかったのに…って。だから、そんな〝場〟を設けてもいいのかなと思って、月に一度、この家でみんなでごはんを食べることにしました」

石田さんは自分自身も、人に、そして町に、助けられてきたと言います。「せっかく同じ町に住んでいるのだから、困ったときはお互い様。頼り合いながら暮らしていけたらいいですよね」と、やさしい笑顔でこたえてくれました。

つらい時はつらいって素直に
言える場が必要だと思います。

「生きづらいと感じることはなんですか？」

- 仕事
- 家族の病気
- 終活
- いじめ
- ジェンダー問題
- 夫婦別姓で結婚できない
- 男性中心社会
- 在日外国人への差別
- 迷惑行為
- マナーの欠如
- 社会格差
- 歪んだ利己主義
- 家庭内の男女不平等
- 貧困
- 障がい者であること

フォーラム講演会会場アンケートより